

努力する人間になつてはいけぬ

学校と仕事と社会の新人論



四六判・496頁・2940円  
ロゼッタストーン  
978-4-947767-12-7

い。すでにここに至るまでに我々は彼の日常的なエピソードを交えた入念な「コア・カリキュラム」によって、その晦渋な哲学を完全に理解できるような境地に訓練されているのだ。

東北大震災を契機に歌われた森進一の「港町ブルース」の歌詞にある気仙沼。その歌は彼岸からの「意味」の到来であり、三〇年前の新人時代から変わらざる反復され続けてきたその歌は「それ自体でとれただけ大変なパワーを保持しているか」。

学校・大学が「最初のもの（アルケー）」がもつみずみずしいものを「制度や社会が強いる「制約に打ち勝って」「やむを得ず」を「復する」という本来の在り方に戻すためには、教師も、あるいは企業の経営者も、「新人」と同様、時間を歪ませるその「最初のもの」の立ち上がり立ち戻るパワーにエネルギーを維持しなければならぬ。ハイデガーすら超克せんとする気宇をもつ菅田哲学の「序章」――と筆者は固く信じている――がなぜ教育論・ツイッター論として書かれなければならなかったのか？

この書物を熟読すべきは、この書物が主要な読者として想定している若者だけではなく、私も含めたすれっからしの人たちなのかも知れない。（おおの・ひでし氏）早稲田大学ほか非常勤講師・フランス文学専攻）

★あしだ・ひろなお氏は人間環境大学・副学長（岡崎学園理事）、河原学園・副学長、辻料理師専門学校グループ顧問、上田安子服飾専門学校顧問。著書に「書物の時間」など。一九五四（昭和29）年生。

しかし菅田のこの本はそれで終わりではない。この書物の白眉でありこうした実践を支える哲学が開示されるのは、第九章「ツイッター・微分論」と題された「機能主義批判」においてである。「個性」を、あるいは個人の「自主性」を強調する教育の背後に、菅田は、パブロフの条件反射に起源をもち、サイバネティクスや、行動主義などに通底する悪しき思考様式がある

？

学生にお客様に自由にメニューを選ばせるのはもともと新自由主義者フリード

もと新自由主義者フリード

## 教育実践を支えるエネルギー

### すれっからしの人

### こそ熟読すべき書物

大野 英士

マンの「教育パウチャー論」ことを見る。インプットとアウトプットとの間の相関という近代の科学を支配するこの思考モデルは、両者が同時に生成されるツイッター空間の創成に至って、△現在Vの共有を強迫神経症的に迫り、人間の死をも記号化させ、死への関与としてコミュニケーション化（ナンシー）してしまう。

菅田はこの近代の宿痾ともいふべき機能主義の瀰漫をアリストテレス、ヘーゲル、ハイデガーの時間論を踏まえて徹底的に批判するの

だ。ここでは用語も思考の運びも、菅田本来の容赦のない哲学的思弁が展開される。しかし怖れることはな

育、生徒や学生の自主性に任せるという教育は一見するともっともろしく聞こえる。しかしその個性・意欲主義教育は教育の現場で全く機能せず、逆に格差を広げているところか、学ぶ意欲すら奪っている。なぜか？

学生にお客様に自由にメニューを選ばせるのはもともと新自由主義者フリード

もと新自由主義者フリード

著者菅田宏直に最初に会

ったのは筆者が30過ぎておめおめと早稲田の大学院に入学した時。デリダの『声と現象』を読んでいた故高橋允昭のゼミで強烈な異彩を放っていた。当時30台前半の院生でありながら黄色のボルシェで息子さんの送り迎えをし、酒は一滴も飲めず、傲岸にしてしかし抜群に出来た。筆者が遅い留学を終えてフランスから帰国した時、菅田はIT系の専門学校の校長になり文科省の審議会の委員を務めるようになっていた。三度目

彼の存在を意識したのは3年前ツイッターを始めた時。論難者を「アホ」の一言で切り返し、議論を進めるうちに自分の手の内に誘い込み有無を言わず「折伏」するツイッター論壇無双の論客として。しかも今

度は東海大教授の肩書きを手にしていた。本書で「うさん臭い出世をする人の特徴」という節の題名を見た時は思わず吹き出しそうになった。

しかし、『努力する人間になつてはいけぬ』とい

# 読物

# 文化